

浄土宗のみおしえ

宗
紋



つきかげようしょう
月影杏葉紋

7

豊かな心

先日、知人から数枚の写真が送られてきました。私はその写真を写した時の様子を思い出しながら一枚一枚見ていましたが、ふと気がついたことがあります。それは、それぞれの写真を見る時、真先に自分を捜すのです。周りに写っている風景より、一緒に写っている人達の表情より、まず自分の姿を見ているのです。そして、自分の写っていない写真は見ている時間が短いのです。このような体験を皆さんもお持ちではありませんか。写っている自分の顔、服装、スタイル等を真先にみるのではないのでしょうか。

これはどういふことなのでしょう。自分が写っているのだから当然と思われるかも知れませんが、自分が写っていると何故当然なのでしょう。私が思うに、人間はそれだけ自分が大切なのではないでしょうか。他人のことよりまず自分、それが本性なのでしょう。仏教的に言い表せば、自我・我欲ということですね。しかし、それだけ自分を大切に思い写真を見るのなら、もう少し深く自分を見つめて

いただきたいと思えます。どういふことかと申しますと、自分の顔の奥にあるものを見つめるということですね。自分の顔をよく見つめて見るといろいろと見方が浮かんてくるものです。目のあたりが親に似ている、鼻筋がおばあさんに似ている、口許がおばあさんに似ている等、見れば見るほど、自分の顔が大切なものに思えてきます。美しいと思う人も、気に入らないと思う人も、このようなことを思いながら見ているうちに、親から与えられた自分の顔が愛しくなるのではないのでしょうか。世の中にたった一つしかない顔なのです。

このことは顔に限ったことではありません。自分の姿についても同じことがいえるのです。そうです。自分自身はこの世にたった一人しかいないのです。もし自分自身がいないのなら、写真の中には自分の姿は無いのです。これまた当然のことですが、考えてみますと不思議なことなのです。もし、皆さんのご両親がいなかったなら、おじいさんがいなかったなら、おばあさんがいなかったなら、もっというなら、数えきれないほどいるご先祖のうち一人でも欠けていたなら、皆さんはこの世には存在しないのです。写真の中に自分が

いる。それはすなわちご先祖の一人一人が精一杯生き抜かれた証しなのです。皆さんの中に、「私は自分のことなど大切だとは思わない」という方がいたなら、それは間違いです。他人から自分のことを悪く言われて平気でいられる人がいますでしょうか。同じように、自分の家族のことを悪く言われて心から笑える人がいるでしょうか。私はいいと思います。皆自分が大切なのです。その自分に気がついたなら、ご先祖を大切にしたいだきたいと思えます。この世の中に大切に思える自分が存在している。このことは一重にご先祖のお陰なのです。ご先祖に感謝いたしましょう。ご先祖をおろそかにするということは、自分を忘れてしまうことです。しかし、分刻み、秒刻みで流れている今日の社会の中で、常にご先祖のことを考えているということは困難なことだと思えます。ですから、写真の中の自分を真先に見つけた時、自分の姿の奥にいるご先祖のことを考えていただきたいと思えます。今ここでご先祖について気づかれた方も含め、顔を知らなくても、生活を知らなくても皆さんには必ずご先祖がいっぱしやるのです。どうぞ、写真を見る時にはこのことを

思い出して下さい。

また、ご先祖との最も近い窓口ともいえる菩提寺や、お墓に行かれた時、ご自宅の仏壇の前に座った時、感謝の気持ちで合掌していただきたいと思います。

「私をこの世に出してくれてありがとう」「たくさんの人に会わせてくれてありがとう」「喜怒哀楽のある生活がありがとう……」。皆さんそれぞれ感謝することがたくさんあるのではありませんか。そのような時には、感謝の気持ちとともに、これからも暖かく見守って下さいという思いを込め、「南無阿弥陀仏」と口に唱えていただきたいと思います。大きな限りないお力により生かされている自分を感じ、お念仏を唱えた時、きっと皆さんの心の中で、暖かい何かが、はっとする何かがあると思います。お念仏を唱えてご先祖に感謝すること、このことが、ご先祖のご恩に報いるなよりの供養なのです。と同時に、心のない精神の空白の時代といわれる今日を生きる私達の生活に、何とも言い表すことのできない潤いを与え、豊かな心を育む糧となると思います。

法事の意義

「法事」というのは、広くいえば仏法の行事全体、つまりお釈迦様の教えに従って勤め励むということでありますが、今日では、今は亡き人の年回法要のことを呼ぶようです。この場合、別の言葉では追善供養とも申します。「追善」というのは元来「追薦」または「回向」ともいまして、故人のために後から追って善いことを振り向け、捧げることあります。そしてその実践として供養ということが行なわれるわけであります。私たちが本尊様を敬い拝み、掌を合わせ、さまざまなお供えをすること等によって、その善行が故人の所へ後から追ってゆき、そして故人がそれをもたらって功德が受けられるわけであります。

また仏様や故人に対して供養するということ、この世で生活している私たち自身にとっても、意義のあることと思われるのです。

例えば、私たちは仏前のお供え物の一つとして、花を捧げます。この花を単に仏様のために供えるのであるならば、それを仏様の方へ向けるのが自然でありましょう。

しかし、実際には仏様に背を向け、われわれ礼拝する者の方へ向けます。これには、花によって美しく飾られた様子をこちら側から見ると私たちの心がいつもこの花のように美しく清らかであるよう、改めて願うという意味があるのです。

また灯明をあげますが、これには仏様のいらっしゃる場所を明るくするという供養の心の表われとともに、私たちに与ってこの光は、智慧の光でありまして、われわれ迷いの世に生きている者の心の暗闇をひらくものであるのです。ここで申します智慧とは、物事に対してバランスのとれた正しい見方をすることとあります。私たちは、とかく自分を中心にしがちです。他人のことは平気で批判できても、自分自身に対しては、ついつい甘くなります。われわれは一人一人勝手に生きているわけではなく、お互いに依存し合っているのです。周囲の人々や物、また目に見えない大きな力によって自分が生かされていることに気づけば、自然と周りの人・物に対して感謝の気持ちが湧いてくることでしょう。灯明を捧げることによって、物事の両面を見たり、全体をいろいろな角度から眺めることによって、正しい判断

ができる人になるよう教えられるのです。

食物等、供物を供えるということとは、仏様に対する感謝の表現であるわけですが、同時に私たちに与っては布施という修行の実践になっております。他人や世の中に与って施しをすることです。この場合、形のある物を贈ることだけでなく、人に対して明るい笑顔で接したり、思いやりのある暖かい心で、優しい言葉をかけてあげるといったことも立派な布施行であるのです。お釈迦様は「施して喜び、施した自分と、施しを受けた人と、施した物と、この三つを共に忘れるのが最上の施しである」というお言葉を残しておられます。私たちは、自分が世話をしたことはいつまでも覚えていても、人から世話を受けたことはとく忘れがちになります。実際には、なかなかこのお言葉のように施すのではありませんが、報酬を求めずに施すのが本當の布施行なのであります。物を供えることは多くあります。供養になることは多くあります。例えば故人が残っていた善い行いをそのまま受け継いで続けたり、反対に善くない行いの結果はできるだけ小さくし、やがて消えるよう努力することも故人への供養に

なり、また私たちにとっても功德を積むことになるでしょう。

故人の年忌等に際して、親類・近所の方々また故人とつき合いの深かった人々が集まって、現在の豊かな時代を築くために努力をされた故人と自分との関わり合いを思い、感謝の気持ちを新たにしてい、自分自身の普段の生活態度を反省し、今後の進歩・発展の資としていただければ、「法事」というものが単なる行事ではなく、ご自身にとつて意義のあるものになると思うのです。

仏の道は旅の路

私は大変なめんどくさがりですが、旅行は好きです。旅は、わずらわしい日常からの脱出です。気の知れた仲間達と行くのもいいですが、一人で行く感傷的な旅もそれなりにいいものです。一人旅には新しい自己の発見があるからです。一人旅の場合、私は歩くことを大切にします。時間に追われて休む間のない現代の日本に住む私には、歩くという極めて単純な

行為が、とても価値のあることに思えるからです。実際、歩いていて、眼に映る草花のなんと美しく、吹く風を体一杯に感じることもなんと心地よいことか。おおげさにいえば、私は刺せば血の出る体で、母なる大地を踏みしめていたのです。自然界において、裸の人間は弱い生物です。そのためか人間は集団で行動したがりです。そのくせ一方で、際限のない自由を欲したりもします。

人間の一生はよく旅に例えられます。考えてみれば、人は生ある間、実に多くの人々と関わり合いながらも、心の隅には常に孤独な思いを持ち続けるといいます。死ぬ時は一人だと知っているからです。だから、人生を例えるに、旅・一人旅ほどふさわしいものはないかもしれません。

さて、私がこの法話を、旅の話として始めたのも、実は私自身の旅での体験を通して、仏教を考えてみたいからなのです。私は、数年前の春三月、まだ雪の残る秩父路に、札所巡りの徒歩旅行に行きました。日没が早いため一日の行程を七時間として、夕方四時前にはその日の宿に入ります。予約はしていませんので、雨の中、なかなか宿が決まらない時など、心細く思

ったものです。そこで野宿を覚悟して、このまま歩き続けなければいつか目的地に着くのだと、いったん開き直ると気持ちには楽になるものです。それでも一度だけ、真昼間に道に迷い、ある種のパニックを体験したのです。私は、山の斜面に沿った細い道を歩いていたので、数日前に降った季節はずれの大雪で数多くの杉が倒れていました。他に道がありませんので仕方なく、道をふさが倒木を乗り越えたりぐぐったりして進んでいくと、突然行き止まりになったのです。間違えるはずはないのですが、とりあえず十分ほど前に通過した二股地点まで戻ることになりました。しかし、もう一本の道は展望台への脇道にすぎませんでした。今思うと、すでに私は相当あわてていたようです。地図とコンパスを両手に、何度も同じ道を往復したり、尾根に出れば地理がわかるはずだと、倒木だらけの山の斜面を駆け登ったりもしました。たった一人で山の中において、自分の進むべき道を失うことの恐怖を初めて知りました。あれこれ一時間以上もあつた後、さすがに頭が冷えてきたのでしょう、何度目かに立った行き止まり地点で、私の頭上四メートルほどの高さに段のある

らしいことに、ようやく気づいたのです。急ぎはい登ると、そこに道がありました。下を見るとジグザグの登り道が、雪と土砂と倒木とに埋り、一見行き止まりになっていたのです。私の見つけたその道は、山を越え、里に降り、私の住む街まで続く道です。そして、昨日まで歩いてきた道であり、明日も歩く道です。峠に着くと私は、思わず足元の石仏に手を合わせました。ほんの少し前までの自分を振り返ると、そのほかばかりにさにあきれる思いでした。自分の立つ場所や、進むべき道のあることが、これほど私の心を支えていたことを、まさに発見したのです。道はあたりまえのように、いつもそこにあります。しかし、道ができるには、長い間、多くの人がそこを歩かねばなりません。そして人が一人で歩く時、心の弱点がむき出しになる時、あたりまえのその道は、旅人にとって大変な価値を持つのです。たとえ道に迷っても、きっとそれは一時的なことに違いありません。なぜなら道が終わったのではなく、人の方で道を見失っているだけなのです。だから、思うに、人と仏とのかかわりあは、そのようなものではないのでしょうか。日本には数多の宗教

・宗派が存在し、個人は自由主義の原則にしたがつてそれらを選択できます。また、宗教・宗派の根はどれもみな同じとし、全てを取ることをさえてきます。しかし、それだけではあまりに漠然としています。そこで私はこう思うのです。つまり、私は生まれながらに仏教、とりわけ浄土宗に深い「縁」を持つ者ですが、私はそのわずかな漢字一文字でいうところの「縁」を大切にしたいのです。今この瞬間、私の立つ場所に浄土の教えのあることを、他の言葉で説明できないからです。浄土の教えは、いわば人生を旅する私の道であり、私の称える念仏の声は、いわばそこを歩く私の足音です。そして私は「縁」によってその仏の道を歩いて行くのです。

彼岸に眼を向ける

毎年のことながら暑い暑いといいつつ夏の日を過ごし、やっと涼しさを感じ始めるようになって、私たちの身辺はいつものように忙しく、世の中も相変わらずいろいろな出来事で彩られています。

そういう点で、私も社会もなん

ら変わる所がないように見えます。しかし、四季の移り変わりを通して年々変貌していく社会、そして年をとっていく私を否定することもできません。変わらないものと移り変わるものとの、この世の中に両立しているように思われます。そこで、私は変わらないものは一体なんであるか、また変わっていくものはなんであるかを考えてみたいと思います。

人間は、年月とともに年をとり、やがて死ぬということは誰もが認めていることです。生きているものは、すべて生れて死ぬということは当然のことです。万物は、自然現象により、また人間の力によって変えられていきます。変わらなれないと思っていることすら、実は変わっているであって、私達はそれに気づいていないのでありましょう。

こうしてみると、この世に変化しないものは何もないように思われてくるのです。すべてのものは変化し、決して不変恒常でないとするれば、一体なにが不変なものであるのか。

私達は、真理は古今不変のものであるといえます。そして、人間は生死の間にさまようものといわれています。そして生死の間で、

さまよう姿であることもまた真実でなければなりません。

「ああしたい」「こうしたい」「こうありたい」と思い、「ああもし、こうもする」ことは、文字通りあくせくすることであって、私達の日常の暮しというものは、このようにして迷いながら日々を送り死に近づいていくのであります。

この迷いの世界の中にいるということに気づかず、私達は、それを迷いと思っていないところには、本当に生きて行く上での徹底した反省がなされないのではないでしうか。

真理を直視し、この迷いの世界の中で私達の生き方を立て直していくことが、大切なことです。しかし、迷いをなくすということは、実際には日常生活を全く否定してしまうことに等しいのでありますから、迷いの世界は世界として、それをそのまま認めることによって、新たな世界へと、眼を開くようにしたいものです。

仏の教えは、正にこの新しい世界をさし示すほかにないのです。

仏教は生死に迷う此の世の中から、彼の仏の世界へ到達する道を教えているのです。

ですから、この新天地、すなわ

ち彼岸に眼を向けることは、まず此の世が迷いの世界であること、私達の日常の諸行、いろいろなしぐさは、すべて迷いの結果であることを知ることによって為し得るのです。

日常の忙しい生活の内にも、今一度、現在の自分の生活をかえりみて彼の世界に眼を開いてみることは大切なことだと思います。ご先祖の供養をするのも、彼の世界に眼を開き彼岸へ到達したいという願いをこめて、阿弥陀仏を礼拝し、如来への帰依を表すのであります。

変わるものから変わらざるものを求めること、迷いから真理へいたる道はけわしく、此岸から彼岸への到達は、ただ如来へ帰依する以外にその方法はないということに気づかされるのであります。

私達は、せめて年二回巡りくるお彼岸に日々の生活をかえりみて、迷いの世界にあることを認め、新しい世界即ち彼岸に眼を向け、思いをいたしてみましよう。

